

諏訪の「御柱祭」より

近藤信義

はじめに

なぜお祭りを見るのか。お祭りの興奮が通りすぎた心身に訪れる爽快さを味わいに、いつもどこと定めたわけではなく「お祭り」と聞けば飛び出していっただけだった。およそ、なぜお祭りを見るかなどとこと改めて問うたこともないように思う。与えられたテーマは難問だ。だが、考えねばならぬ。

昭和六一年寅歳、三月一日、たまたま諏訪大社上社の御柱祭の「奥山出し」に出かける機会をもった。この御柱祭の神祭諸行事は神木の選定という二年前からの準備の期間を経て、当年三月の伐採から始まり、山出し、里曳き、曳き建ひきたて、古御柱祭ふるみんぼしまでの上社関係の祭儀だけでも四ヵ月を要する。さらに、小宮や牧まきの御柱祭まで加えると、秋までかかると聞いた。ともかく、三月初めより御柱に関わりはじめるや、途中でやめるわけにはゆかなくなってしまう。この通いあげた報告書を「諏訪大社式年造営御柱祭の研究―上社を中心として―」（立正大学人文科学研究所年報二六号：昭和六三年度）と題して作成を試みた。意図したところは、神祭の諸行事を追ってその流れを報告することと、「御柱祭」に用いられる独特

のお祭り用語（「御柱祭彙」）を採集して解説を試みることであった。これらの経験と作業過程をふまえて、御柱祭をどのように見てみるかという方向で、方法としての祭り、という問いかけに応えてみようと思う。その中心的な思考は、神祭が神話の実修であるという捉え方につきるように思う。どのような神話（幻想）を見出すことができるか、それが古代文献の読みとどうつながるかということである。

一、諏訪の御柱祭について

諏訪大社は諏訪湖をはさんで南に位置する上社、北に位置する下社にそれぞれ二つの宮を持つ神社であり、形態的にも独特であるといえよう。

上社	本宮	祭神	建御名方神	諏訪市中洲
	前宮		八坂刀売神	茅野市宮川
下社	春宮	建御名方神	八坂刀売神	諏訪郡下諏訪町
	秋宮	配祀	八重事代主神	諏訪郡下諏訪町

この上社、下社に共通する祭が七年毎、すなわち寅と申の歳に行われる「諏訪大社式年造営御柱祭」であり、広く「諏訪の御柱祭」で

知られる。「式年造営」とは祭神遷座のための宝殿を造営することであるが、上社の場合は本宮に新旧の宝殿があり、下社の場合は春宮、秋宮にそれぞれ新旧の宝殿を持っているのでその造営は上社に比して複雑である。ただし諏訪大社の場合、遷座は式年の歳に造営された新宝殿に遷るのではなく、七年間雨風にさらされた宝殿に遷るのである。これも独特と言ってしまえばそれまでのことだが、やはり相応の由来や理由があるに違いないのだが、よくわからぬことの一つである。この間の事情を『諏方大明神絵詞』に「先年造替ノ新社ハ七廻ノ星霜ヲフレバ、天水是ヲ洗ヒ、降露カハク事ナシ、当社奇特ノ随一ナリ。自ラ潔斎シテ今度遷宮ヲナシ奉ル……」と記しているが、果たしてこの理解が本来的な理由を解いているものか確かではない。あるいはもっと別の考え方、事情がひそんでいるのかも知れないのである。

この遷座祭は神社側の祭りであり、これに対して「御柱祭」は諏訪（古くは信濃）一円の氏子達の祭りである。祭りの主役はオンパシラと呼ばれる神木であり、神社の四隅に曳き建てる祭りである。上社の場合、神社東方に当たる八ヶ岳、その一峰の阿彌陀岳の支峰の御小屋山（山の形状から見れば阿彌陀岳の端山と言え）一帯が社の神領地である。この山中に自生する樅の大木八本を神木として、祭年に先立つ二年前の夏より仮りの見立て（選定）の作業に入り、本見立て（一年前夏）を経て当年を迎えるのである。

現在では御柱の伐採は地区毎に籤を引いてその担当を決めているが、以前は八人衆（山作り）だけの作業であったという。明治期はまだ八人衆で行っていた。そのため伐採は一週間も山に籠もりきりであったということだ。この伐採の作業自体が山作り衆の神聖な作

業であって、厳しい精進を経て行われていた。現在もその神事的かつ儀式的遺風は保たれており、御小屋山の山の神に安全を祈願した上で伐採にとりかかるが、どの神木も山作りが先ず、神斧を用いて一の斧を入れなければ、他の誰もこの神木に斧（よき）を入れることができないという掟が守られている。これが伐採式である。つまり、現在の伐採式は山作りたちの作業を儀式化したものだ。儀式とは模倣のかつ象徴的行為であって、しかもそこに本来的な有り方がほの見えるものなのである。

この儀式を経ることによって、伐採という具体的な作業に入る。現在は氏子たちが行いが、しかしその作業は本来山作り衆の行ったと同じ方法で行われるべきものとしての意味付けが貼りついている。つまり最も始原的な伐採方法がそのまま行われているのである。山作りが一の斧を入れるというのもその意味の確認である。また実際、伐採は終始、斧（よき）を主体にし、鋸は補助的に用いられるだけである。

二、御柱の曳行

木遣り歌の中に「御小屋山の山の樅の木は里にくだりて神となる」という歌詞があるが、これは神木の運命をよく表していると同時に、お祭り全体をよく表している。神木の曳行は、山出し祭、里曳き祭の二度の大きな祭礼を経ることになる。昭和六一年四月四、五、六日が山出し祭、五月三、四、五日が里曳き祭であった。

山出し祭は御小屋山の山麓の綱置き場から茅野市安国寺の御柱屋敷までの約一ニキロの、通称御柱街道を曳行する。里曳き祭は前宮までの約〇・六キロ、本宮までの約二・ニキロを曳行して曳き建て

を行う。どちらも延べ人数でいえば三〇万人を越す人出となり諏訪中の熱狂ぶりが知れようと云うものである。「人を見たくば御柱」とはよく云ったものだ。上社曳行の特徴は神木にメドテコという飾りを前後につけるところにある。バランスをとるためとか、楯取りになるとかいわれている。おそらく道中の智慧が生み出したと思われるが、効果的な装飾でもある。

曳行において重要と思われるのは、御柱が休息するところ、即ち綱置き場も御柱屋敷も、それぞれ山麓の境界地、宮領域（と考えられる）の境界地に位置していると思われれることである。さらに、通過地点にいくつかのポイントがあり、たとえば寝の神（玉川地区子の神）はかつては本宮一の御柱が必ず一夜を過ごした地点といわれている。ここは山里と人里の境界地であったと思われる。また、後に触れるが木落とし坂も川越し地点もそれぞれ境界としての意味を持つていると考えられる。境界点はすべて特殊な場所といえる。神木の通過はするように扱われている。

曳行は神木の先端部分を細工して雌雄二本の太い曳き綱をとりつける。中には二〇メートルもあろうかという長大なものもある。この綱に氏子たちはさらに細い自分用の綱を巻きつけてそれを持って曳く。曳行に必要なことはこの神木を常に地面を引きずってゆくことであって、決してかついだりはしない。この習わしも神木が神の木として成長する上で重要な要素となつていてと考えられる。地霊との交歓という要素も考えられる。あるいは、土地霊を付着させるといふ考えかもしれない。

木落とし、川越しと呼ばれる難所がある。これらは街道中の自然の障壁地点だが、この通過に曳き手の力量と度胸が試されることに

もなり、ひとびとの思い入れが生じるところでもある。

木落とし坂と呼ばれる場所は御柱街道が上川にぶつかって崖状になつている地点である。この坂上に立ってみると、坂下に人家が並び、その向こうに丁R線を隔てて上社の社が見えている。全長二〇メートルほど、最初の五〇メートルほどは四〇度ほどの急勾配となつている。ここは命がけの難所である。それだけに神力の頼りを得なければならぬ。しかもそれゆえに最大の見せ場でもあるので各御柱とも装いをととのえる。メドテコなども特別大きなものに取り替えて派手さを競う。メドテコ上にはお揃いのほっぴ、曲乗りもある。おんべをふり、ラッパ隊、木遣の歌い手が喉を競い景気と緊張感を盛り上げてゆく。また神木の先端の位置を誰が占めるかも話題の種となる。神木の曳行はそれぞれの地域の共同作業の円滑な作業によつて成就するわけだが、またそこに地域連帯の協調が生み出されてくるわけだが、そうした全体的な一面とともに、見せ場においては個人の卓越した力量の競演と、それを賞賛する周囲との活気に満ちた対応が生みだされる。神事が芸能を呼び出してくる現場でもある。荒々しいがたくましい芸が発生している。

木落とし坂をあたかも飛行機の胴体着陸のような迫力をもつてすべり下りた神木は次に川越しが待っている。八ヶ岳に発する宮川の雪解け水は四月上旬でも身を切るように冷たいと言う。御柱の御洗身ともいっているが、山出し最後の難所である。「青木の社」と呼ぶ渡河点は、幅約四〇メートル、川の改修前は六〇メートルはあったという。ここは綱の曳き方（曳き綱衆ともいう）には土手を隔てているために神木は見えず、柱方と曳き方との呼吸の合わせ方が最も難しい。気合を合わせるのもつばら木遣の歌い手によつて双方の呼吸が整

えられ、これを何度も繰り返しながら川を越えてゆく。しかし渡河に危険はつきもので、神木から振り落とされて川に流される氏子も続出する。万葉集に「藤原宮の役民の作歌」に「……八十宇治河に玉藻なす 浮かべ流せれ 其を取る と さわく御民も 家忘れ 身もたな知らず 鴨じもの 水に浮きいて……」(巻一・五〇)と歌われている光景の再現のようである。これも長く三日におよぶ曳行を経てくることよってこの難所を越える伎倆を氏子たちが会得してゆく結果がここに表れてくるのであろう。木遣歌は「協力一致でお願いだー」を鳴き(歌うこと)続ける。

このように山出しはいくつもの難所を経て御柱屋敷に引きつけられる。その三日をふりかえって見ると、それは正しく神の巡行の姿がそこに再現されていると見ることができ。しかも神木と氏子が一体となって巡行している姿である。山を越え、坂を越え、川を越え、そして人里近くのお旅所としての御柱屋敷にしばしの休息をとることになる。まことに見事なまでの神劇といつて差し支えなく、演出も巧みである。苦難の巡行の果てによりやく鎮まる場所を見出す、『風土記』に数多く見られる神の巡行による命名、即ち地名起原譚の実修をここに見る思いがする。

三、御柱祭彙から、オンパシラ・ミハシラ

御柱屋敷からお宮までの道中を、里曳きという。上社は五月三、四、五日をかけて行われた。山出しの荒々しさが消えて、明るいお祭り気分が里をおおう。四日、五日と順次御柱は曳き建てられてゆく。中でも華やかで見映えがするのは何といつても本宮一である。

諏訪の神社がなぜ四隅に御柱をたてるのか、これには諸説があ

る。その紹介は『諏訪の御柱祭』(宮坂清通・甲陽書房)に詳しい。また新たな見解が『御柱祭と諏訪大社』(筑摩書房一九八七)に紹介されているのでそれらにゆずる。

ところで御柱を建てることを、「建て御柱」と多く耳にしていた。ところが式年御柱大祭の祝詞を聞くと「おおみはしらひきたての云々」「みはしらたて云々」「古みはしら云々」と聞こえてくる。そこであらためて御柱に用いられる祭り語彙を見直してみると気付かされるのがいくつも出てきた。中でも特徴的な表現は、

(オンパシラ——みはしら

タテオンパシラ——みはしらひきたて

の二つがある。これは神木をめぐって氏子たちはオンパシラ・タテオンパシラ、と呼び、これが通用している。したがってこれは里方のことばとみなすことが出来るだろう。一方、祝詞を含む神社側は、みはしら・みはしらひきたて、と呼んでいるわけで、これを宮方のことばとみなすことが出来るだろう。しかも「タテオンパシラ」は「みはしらひきたて」に対して逆語序になっている。このことばの持ち手による差異をどのように見るべきであろうか。

尊称の接頭語オンはオホミ・オホノ・オンと変化してきたものと言われる。オホンは中古になって表れる形で古代のオホミ(大御)の音便と考えられている。このゆるやかな撥音便から次第に短い撥音に変化してきたといえるが、その変化の過程を文献上「御」の字から見出すのは難しい。辞書的な知識だがオンはおよそ中世の表現といえるようだ。

これに対して、同じく尊称の接頭語ミは古代から通史的に表れている。このオンとミに尊称の差異があるのだろうか。表現のこの二

面性(位相)をどのように考えたらいのか。例えば、ミケン—(御衣)—オンゾ、ミター(御田)—オンダ、ミコー(御子)—オンコ、ミグシ(御髪)—オングシ等々。時代による差異ということも考えられるだろう。だが、ミハシラーオンバンシラのように同一の対象に対する別々の表現は、その語の持ち手によって差異が表れるということに手掛かりを求めてゆくことは出来ないであらうか。

次にタテオンバンシラ—みはしらひきたての語序の問題。「みはしらひきたて」或いは「みはしらたて」はこれも祝詞に用いられている表現でことは通り素直な語序である。それに対して、タテオンバンシラは逆語序となっている。

逆語序のありようは既に早くから問題となっていたが、とりわけ折口信夫はやまとの古語と、沖繩の語彙とを比較検討しながら、「日本語における古い別種の語序が曾て存在した事が事実であり」(『日琉語族論』全集第十九巻)とし、逆語序時代(旧語序)、新語序時代(正語序)という視点をだした。勿論、全てのことばのありようを言ったものではなく、旧語序の行われた時代を想定しつつ、古語の中に国語の変化を見いだしたのである。

さて、タテオンバンシラを考えると、果たしてこうした根源的な問題を持ち出す必要があるか、いささか大袈裟に過ぎるようにも思う。むしろ、正語序時代になってから生産される逆語序のことばへの意識や感情が、発生論的に意味を持つかもしれない。神ごとに異なる人々の特殊な感情が生み出す語として、この逆語序が表れてくる、いわば、先祖がえりの現象として見た方がよいのかも知れない。その場合、タテオンバンシラ、オンバンシラを里方のことばとして同位置においたとき、位相語としての宮方のことばのミハシラヒキ

タテ、ミハシラとの差異を計る手掛かりが与えられているように見なすことはできないであらうか。今十分に検討する余裕を持たないが、祭り語彙から生じてくる問題である。

四、山作り祭

上社の場合、とりわけ注意しておきたいことは、この神木の選定、伐採、曳行中の神木の管理、お船作り、御柱迎え、冠落とし、さらには神領の山の管理の責任を世襲の集団が負っていることである。先にも述べたが八人衆とも山作りとも山見とも呼ばれている人々である。彼等は神之原(茅野市玉川神の原)に居住し、現在も上社からの委託を受けて神木に関して特別の奉仕を続けている。なぜ彼等の家が世襲となったのか、その根拠はなにか。山作りが特定化して特権的な位置を持つに至ったについては特別な由来があったと思われるのだが現在では失われている。おそらく語りを見出せば神話的はずだ。

しかし、たとえば次のような由来の有り方からも多少類推は可能であろう。山作りには神斧かみとよぶ朱塗りの斧があり、現在のものは大祝頼隆が御小屋明神に寄進したものを山作りが奉持(元禄三年の文書あり)しているものと伝える。この斧は伐採に際して一の斧(最初の一振り)に必ず用いられ、あるいは冠落かんらくとしの一の斧に用いられるというように儀式的な意味合いを強く見せている。つまり、山作りの作業が神事であることを示す象徴的な役割を果たしている。大祝(おおほり)とは上社の最高の祭祀官であって、諏訪明神を具現した人格神であるという信仰を有している。この大祝から神斧を委託されているという有り方は、山作りの集団と大祝家と

の間の特殊な関係を物語っていると思われる。つまり、山作り衆に
 とつての職業上の誇りの根拠が、たとえば大祝からさえも信任を得
 ているという事実を支えられることでもあるのだが、なにゆえにか
 かる信任を得られるかを訊ねる時、そこには必然的に神話をもつて
 起源が語られる由縁があったと思われるのだ。

山作りの作業には神事的要素が濃く表れているが、それは単に作
 業人としての山人ではないことを示している。中でも重要な職能が
 発揮される場面が神木の選定ということにあるのであろう。つま
 り、神木を見立てるといふ作業は、神の靈威が顕れている木を発見
 するということである。したがって、彼等は、神木を見出す靈能の
 持主という周囲の人々の幻想の中にいるはずである。山作りが最も
 重視され、かつ、評価を受けているのはおそらくこの一点があるか
 らであらう。いつて見れば、本来的な専門職人の発生である。今回
 も次のような事件がもちあがった。

三月二日、御柱伐採の当日、すでに各地区に分かれて神木の伐採
 が始まっている中で、ある地区の人々が、その神木の先端が曲がっ
 ていることを理由にして、神木として相応しくないとして伐採すべ
 き木の変更をもとめて騒ぎが起こった。氏子たちは地区の総代を相
 手にして抗議するが、総代たちは氏子たちを説得しようとする。そ
 こでなかなか納まりがつかない。雪の山中で言い合うだけで時間が
 すぎてゆく、結局騒ぎに決着をつけたのは山作りの当役原光秋氏で
 「神さまが選ばれた木だから」といふ一言に説得力があった。

このような事件の推移をたまたま見聞したのだが、ここにはやは
 り、山作り衆に対しては抗うべきではないという氏子たちの中に植
 えつけられている伝統的な観念が働いているゆえで、それは彼等山

作り衆の職能に対する尊敬の念であると云ってもよいだろう。ま
 た、裁定した山作りも毅然とした態度で誇りに満ちていた。

五、古御柱と中金子村―御柱休め―

上社の場合、古い御柱の処理をめぐる特殊な関係を持つ村があ
 った。それは八立（はちりゅう）神社（祭神は建御名方富命の御孫
 八立尊、御父は八杵尊）を囲む、中金子村（現諏訪市中洲の中洲
 地区、中金子村は旧名）との関係である。新しい御柱が曳行されて
 いる最中、その一方では古い御柱を撤去し新御柱を迎える準備がな
 されてゆく。それを受け持つ村である。村史によれば、もともと本
 宮、前宮の八本とも八立神社に曳きつけられていたが、いつの頃か
 らか前宮分は神宮寺村が請け負うようになり、そしてまた現在は神
 宮寺村はその権利を放棄しているという。（『中洲村史』参考）

古い御柱を撤去し、八立神社に曳きつけ安置することを、御柱休
 めと呼ぶ。今回の場合四月一九、二〇日に執り行われた。一村挙げ
 ての盛大な祭りとなる。この八立神社境内に曳き付けられた神木に
 関しては、古御柱祭（六月二日）において神木から霊が抜かれる
 まで、疎略に扱わぬよう配慮される。村の氏子たちもこの祭りをち
 ゃんとしないと新しい御柱の意味がなくなるというて尊重してい
 る。とりわけ新しい御柱が曳き建てられる里曳きの時までには注意が
 払われる。つまり、御柱休めとは諏訪大社に御柱が不在の期間があ
 ることを意味しているわけで、たとえ、八立神社に御柱を休めてあ
 っても、その神格にはなんら変化がないという考えによっていると
 思われる。

ここで一つの問題は、なぜ八立神社に古い御柱が預けられるよう

になったのか、という由縁についてである。上社とそのゆかりのある村の神社との特殊な関係、いわば契約関係が生じるにつけては、必ずやそこには由来があったはずと思われるのだが、現在は残っていない。かすかに氏子の記憶には祭神の母神の化粧料とも、母神の娘の化粧料ともいい、上社と八立神社とに血縁的な関係があることを暗示しようとしている。あるいはこうした伝承は八立神社にとっては第二義的に派生したものかもしれない。もともとの経緯はどのようなものであったのか。しかし、村人にとっては祭り（奉仕）の根拠を求めたくなるはずのことからである。そこに起源的に働く神話が求められる必然が存しているように考えられる。伝承を生み出

す構造はこのようにあるということであろうか。

ともかく、中金子村は八立神社との関わりにおいて、御柱年に古御柱に関わる諸行事の責任を担うことになっている。さらに、新しい御柱に関しては、その穴掘り、御柱の根元の土入れ、真っ直ぐに立っているかの見極め、さらに御柱の根固め等、その最も基礎部分の作業責任を担っているのである。その作業の場には常に「中金子村」と墨書した旗印がある。

以上、印象的な部分を中心に箇条的に記したが、諏訪信仰との関わりを深めることが今後の課題と言えるだろう。

「古代文学」総目録

27号（昭和六十三年三月一日発行）

特集〈神話研究史・読みと解体と〉

イザナキ・イザナミ神話―神話研究の内部と外部―

アマテラス神話

―古事記研究における〈読み〉と〈解体〉と―

スサノヲ神話―〈神話〉研究と『古事記』―

八千矛神話―〈歌謡と散文をめぐって〉―

岡部隆志
板垣俊一

飯田 勇
居駒永幸

柿本人麻呂留京歌群の発想と表現
まなご―流浪する幼神の系譜

三輪山型神話をめぐる語りの構造
―『古事記』崇神天皇条の叙述を中心に―

真下 厚
清水章雄
石井正己